

第26回統合医療学会  
タッチケアと  
コロナ感染症

銀座レンガ通りクリニック

©白井 幸治

# (一社)日本統合医療学会 COI (利益相反)開示

発表者名(全員記載): **臼井 幸治** (◎発表責任者)

演題発表内容に関連し、発表者らに開示すべき  
COI 関係にある団体等はありません。

# コロナ感染罹患後症状

- COVID-19罹患後、感染性は消失したにも関わらず、他に明らかな原因がなく、急性期から持続する症状や、あるいは経過の途中から新たに、または再び生じて持続する症状全般をいう。

# 代表的な罹患後症状

疲労感、倦怠感、関節痛、筋肉痛、  
咳、喀痰、息切れ、胸痛、脱毛  
記憶障害、集中力低下、不眠、頭痛、抑うつ  
嗅覚障害、味覚障害、動悸、下痢、腹痛  
睡眠障害、筋力低下

**※平均72.5%が回復後1か月を過ぎても  
何らかの症状を認めた（海外での9751例）**

# タッチケア

- ▶ タッチケアとは、『赤ちゃんと親の心と体が触れ合うことにより、親子の絆を深めることの大切さを唱えるコンセプト』（日本タッチケア協会）
- ▶ 1988年、久留米のマリア病院NICUで始まった。入院が長期化した未熟児に対し触れる事で情緒が安定し体重増加、免疫機能にも影響があった。
- ▶ 当院では、東洋医学の経験を元に考案された、施術者が心を無にして行う「サトワタッチケア」を行った

## 調査方法①

- 2022年8月～9月の2か月間に来院した新型コロナ感染者患者を対象に行った。  
通院患者は延べ1206名。男性410名、女性796名。  
内コロナ後遺症患者は12名（平均年齢36歳）で  
同意を得た患者に対してサトワタッチケアを行った
- 基礎疾患：適応障害、発達障害、自律神経失調症  
双極性スペクトラムなど

## 調査方法②

- 場所は診察ベッド。所要時間は5分程度。患者は普段着のまま。施術は腹臥位で、素手で全身を軽く揺すったり、圧をかけたり、触れたりする。
- 効果判定は慢性疲労症候群のパフォーマンスステータス（PS値）を使用した。

# 慢性疲労症候群のパフォーマンス ステータス（PS値0～4）

- 0：倦怠感がなく平常の生活ができ、制限を受けることなく行動ができる
- 1：通常の世界生活ができ、労働も可能だが、倦怠感を感じる時がある
- 2：通常の世界生活・労働もできるが、全身倦怠感のため、しばしば休息が必要
- 3：全身倦怠感のため、月に数日は世界生活や労働ができず、自宅にて休息が必要
- 4：全身倦怠感のため、週に数日は世界生活や労働ができず、自宅にて休息が必要



# 慢性疲労症候群のパフォーマンス ステータス（PS値5～9）

- 5：通常 of 社会生活や労働は困難。軽作業は可能。数日／週は自宅で休息が必要
- 6：調子のよい日は軽作業可能であるが、週のうち50%以上は自宅にて休息している
- 7：身の回りの事はでき、介助も不要だが、通常 of 社会生活や軽作業は不可能である
- 8：身の回りある程度の事はできるが、しばしば介助が要り、日中の50%以上は臥床
- 9：身の回りのこてはできず、常に介助が要り、終日就床を必要としている

# 結果

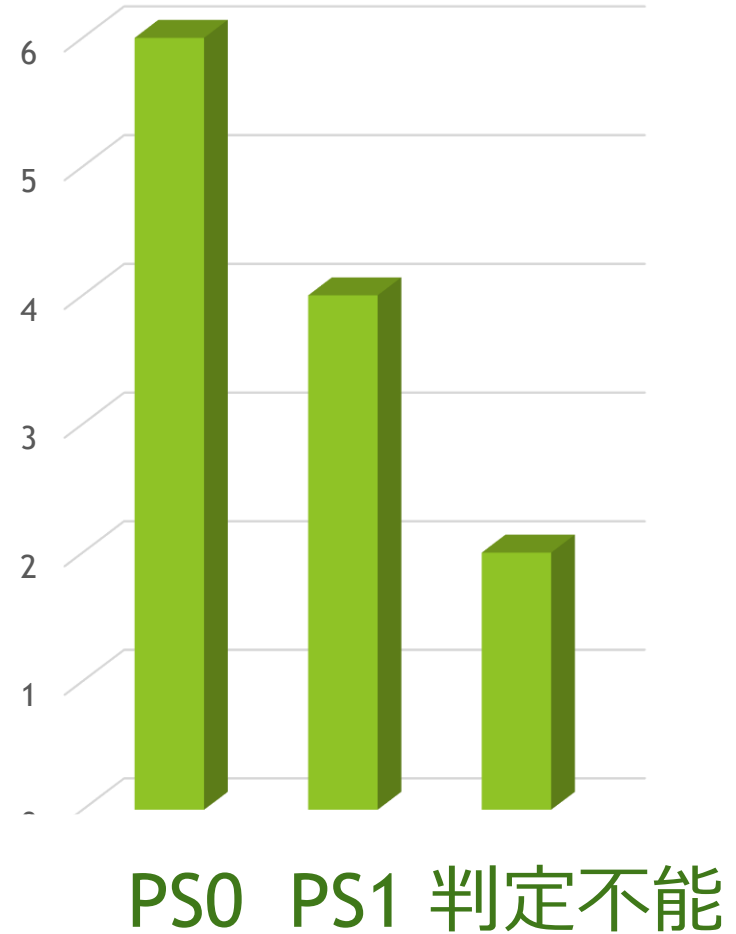
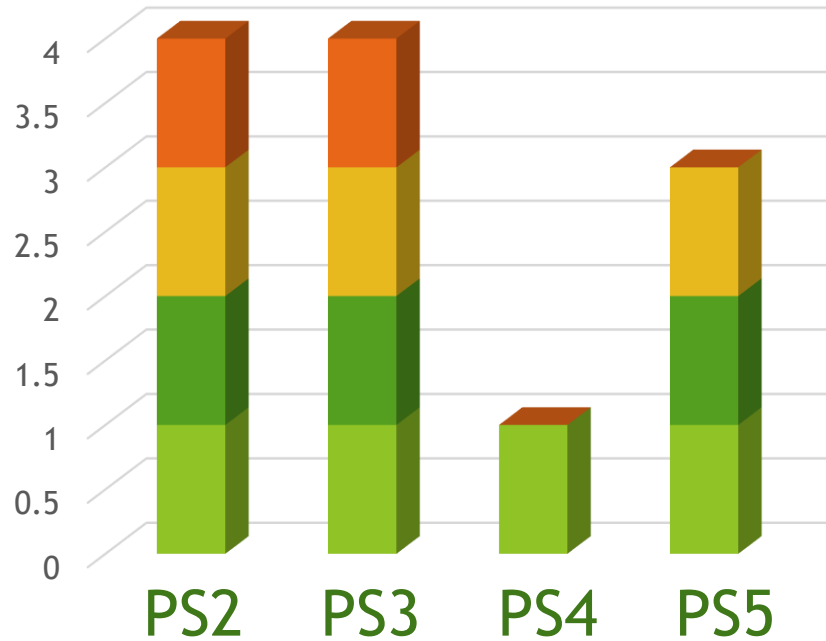
- ・ コロナ感染後から治療開始までの期間は平均 2.5 日  
治療開始時のPS（パフォーマンスステート）  
PS 2：4名 PS 3：4名 PS 4：1名 PS 5：3名

この内、10名が治療直後に「軽くなった」などの自覚を覚え、2名は直後には反応なし。

**平均緩解（PS 0～1）期間は 9.4 日であった。**

※2名は社会的背景があり効果判定は不能であった

# 結果



平均緩解 (PS 0~1) 期間は 9.4 日

# 結語

- ▶ 治療の一環として希望者にタッチケアを施行。コロナ後遺症患者にも一定の効果があった。
- ▶ 比較的軽症患者が多く罹患後早期のため限定的ではあるが、直後に軽快するなどコロナ後遺症患者にとっては有効性があると考ええる。
- ▶ 今後は、科学的データを取ると共に、重症度の高い患者を対象に治療をし適応範囲を確認していく必要がある。